

## ベルクソンにおける等質的時間

山田 秀敏

### (序)

拙論の目的はベルクソン哲学における等質的時間<sup>(1)</sup>の本性を解明することにある。

等質的時間とは時計で計られる時間のことであるが、周知のようにベルクソンはこれに持続を対立させた。ベルクソンの哲学は持続の哲学であるから、持続が注視されるのは当然である。しかし等質的時間も自明なものであるとは思われない。等質的時間とは何かという問いをたてる必要があるのである。

持続と空間が混同されさまざまな哲学的混乱が生じること、そのことに小論は力点を置こうとしているのではない。そうではなく、混同された結果発生する等質的時間の本性を考察することが拙論のテーマである。すべての哲学者が等質的時間すなわち直線としての時間に同じ態度をとっているわけではないだろう。とりわけ等質的時間に真なる実在性を認めないベルクソンのような立場は、その概念のベルクソンの解釈を持っているはずだと推測できる。われわれの関心はそこにある。

本稿は『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』と略記)の思想圏を対象とする。これは『試論』において等質的時間がまとまって議論されているからである。『試論』はベルクソンの最初の主著であるから、ベルクソンの時間論の研究は当然そこを出発点としなければならない。

### (一) 時計の概念的製作

時間そのものに速度があるのだろうか。われわれは時間が「速く感じる」とか、人を待っているときの時間は「なかなか過ぎない」とか言う。しかしながら「速く感じる」のも「なかなか過ぎない」のも、少し反省してみれば、時間のある一定の速さに対してのことだと気付く。時間の速さは一定だという信念をわれわれが持っているからこそ、本来ならば時間の

速さはもっとゆっくりであるはずなのに時間の経過が速く感じられるわけである。また、時間がなかなか過ぎないとは本来ならばもはやしかるべき時刻になっているはずだと感じられるということである。つまり、われわれは日常生活において、あたかも時間に固有の速さがあるかのように感じながら暮らしており、それで不都合はまったくないわけである。

しかし、時間の速さという観念に何か意味があるのだろうか。というのも、速さとは常識的には距離を時間で割った商であると理解されており、時間の速さを計算するために既に時間が必要とされるからである。そこで、無限後退に陥りたくなければ、時間そのものの速さという観念は無意味であるとしなければならないだろう。それは、時間によって速さを計測するのであるから、時間そのものは速さの範疇には入らないという意味である。すなわち時間そのものには速さはない。時間とは速さという概念では理解されないあるものなのである<sup>(2)</sup>。しかし、こうした考えを常識は容易には受け入れないであろう。というのも、常識的に理解されている時間においては速さこそがまさに時間の特性だからである。時間とは未来に向かって進んでいるものであり、進んでいる以上はそれなりの速さらしきものがなければならぬと常識は判断しているはずである。だが、時間に速さはなくとも、時間自体が無ではない以上、「流れ」<sup>(3)</sup>はあると言うべきである。そして、常識も時間の「流れ」という観念を持っている。ただ常識は速さと「流れ」を区別していないのである。

さて、速さとは距離を時間で割った商であるという考え方では、時間そのものの正体が不明である以上、速さを明確に規定することはできない。そこで、速さの観念は同時性によって厳密化されることになる。ベルクソンの言うところを聞いてみよう。

速度の観念を直接的に分析することによっても、同じ結論に達するであろう。・・・  
 (中略)・・・力学はまず、一方ではある運動体の軌跡ABを、他方では同一条件下で無  
 際限に反復される物理現象——例えば常に同じ場所で同じ高さから落とされる石の  
 落下——を表象することで、等速運動という観念を構築する。軌跡AB上で、石が  
 地面に接する各瞬間に運動体が達する諸点M・N・P等々を印付けて銘記するなら、  
 そしてまたAM・MN・NP等々の間隔が互いに等しいと認められるなら、運動は等速  
 であるといわれるであろう。さらに比較項として選択された物理現象を持続の単位と  
 して採用することに取り決めるならば、これらの間隔のどれか一つが、運動体の速度  
 と呼ばれることになろう。かくして等速運動の速度は、空間と同時性の概念以外の概  
 念に訴えることなしに定義されるのである。(D.I., p.87)

この引用からわかるように、等しい速さとは石の落下が区切る軌跡の長さAM・MNなど  
 の等長性である。石が落下し地表に接するのとまったく同時に、M、N、Pといった点が運  
 動体の軌跡に記される。等長性を製作するための石の落下自体に時間が必要であるはずだ  
 と言われるかもしれない。したがって、距離を時間で割っていることではかわりがないの  
 ではないかと言われるかもしれない。しかし、この疑問に関してベルクソンは次のように言う。

われわれは、運動が始まるその正確な瞬間を、すなわち外的変化の一つとわれわれの心理的諸状態の一つとの同時性を、銘記するだろう。続いてわれわれは運動が終わる瞬間を銘記するだろうが、これもまた一つの同時性である。最後に、われわれは踏破された空間を計測することになろうが、実際にはこれだけが唯一計測可能なものなのだ。だから、ここで問題なのは持続ではなく、もっぱら空間であり、諸々の同時性でしかない。(ibid.,p.86)

ベルクソンの言いたいことは以下の通りである。時間が経過することは確かに必要である。そうでないなら運動自体が存在しないであろう。しかし、ここで問題であるのは落下する石が二つの同時性を作り出したという事実だけなのである。「踏破された空間」すなわち長さを製作することだけが重要なのである。等長性を作り出す基準運動がどのような運動であろうとも、地球の公転のように等速運動であろうが石の落下のように等加速度運動であろうが、それはどうでもよい。その運動で唯一問題であるのは正確な再現性ぐらいのものであろう。速度の測定のためには基準運動の厳密な再現性が要求される。

繰りかえされる石の落下によって時計を製作することができる。再現性のある石の落下の観察者がいるとする。この観察者は、石が地表に接するたびごとに、その石を除くあらゆるものの軌跡にM・N・Pなどの同時性を記入していく。自動車の運動の軌跡にも川の流れの軌跡にも、石の一回目の落下との同時性Mが同じように記入される。二回目の落下との同時性Nも同様にその石を除いたあらゆるものに記入される。実際には、この記入は心理的諸状態の「流れ」の中でなされるわけであるが、ベルクソンも言うように、石の落下運動そのものが心理的諸状態にもたらす変化は視野の外にある。さて、石の最初の高さや地表との距離は簡単に測定できる。自動車や川の水が動いた距離についても同様である。このようにして、それらの距離の「比」を求めることができる。これが速さであって、自動車のMNの長さが川のその5倍あるとすれば、自動車の運動は川の流れよりも5倍速いと言われることになるだろう。つまり、ある距離を別の距離で割ったものが速度なのであり、速度とは二つの距離の「比」<sup>(4)</sup>のことなのである。石の落下運動は時計としてはいささか出来が悪いことは確かであるが、しかし惑星の自転周期を秒針で計ろうが石の落下運動で計ろうが、結局は同じことなのである。

こうしたとき、石の落下運動そのものの速さや時間については何も問われていないことに注意しよう。落下した距離こそが速さの実質をなしているからである。落下に必要なとされた時間は単に「比」としての「1」でよい。つまり単位<sup>(5)</sup>でよい。この時、基準時計が製作されるのである。すると、例えば石の1,800回目の落下と共に3限目の授業が始まる、とされるようになっていこう。つまり、われわれは生活のリズムを同時性によって刻むようになっていこう。しかし、そうなると今度は空間的等質性によって基準時計自体が逆に「比」によって測定されるようになるにちがいない。というのも空間的等質性とは交換可能性であるからである。そうなってしまうと、基準時計に対して次の基準時計が作られ、それに対してまた新たにという具合に、基準時計の正確さの追及が行われるようになるだろう。われわれはこうしてセシウム時計を手にするにいたっている。

注意すべきは以下の二点である。第一は、等質性による交換可能性によって、われわれは基準時計においては確かに存在していた運動そのものを、古い基準時計と新しい基準時計との「比」へと解消してしまうということである。最初の基準時計は石の落下によるものであった。石の落下運動そのものは確かに考慮の外におかれていたが、しかし石は落下しなければならなかったのである。砂糖が水に溶けるのを待たねばならないように、われわれは石が落下し終わるのを待たねばならない。ベルクソンの言う通り、この事実は重大である。ところが「比」だけが問題だということになってしまったので、基準時計であった石の落下運動の速さも測定されることになり、落下運動そのものは忘却されるにいたるのである。

第二は、第一の続きであるが、運動における運動そのものと運動した距離との区分は時間の考察にあたっては正当な区分であるということである。運動体は同時性の知覚的確認のために必要とされるが、上記の理由から運動そのものは忘却される。つまり運動そのものは時計時間すなわち「比」としての時間に吸収されてしまうが、しかし、それがなければやはり時計時間もないのである。時計は運動そのものがどこかに存在していなければ存在できない。時計の存在と運動そのものの存在は同時的である。運動そのものと同時性が存在すれば時計が存在するし、時計が存在する時には運動そのものと同時性も存在している。が、時計時間によって運動そのものは隠蔽されてしまう。時計は運動そのものを忘却させる装置なのである。したがって運動そのものと運動した距離を区分しているのは、一哲学者の思想とかいったものではなく、時計自体なのである。だからベルクソンは勝手な抽象をしているのではないし、逆説的なことに、時計時間が同時性に依拠し「比」を測定しているということ自体が、持続の領域の存在を暗示してさえるのである。「結局ここから、この見解がいかに逆説的に見えようとも、外的諸現象の間に、数学的な内属の諸連関を想定することは、その自然な、少なくとも首肯できる帰結として、人間的自由に対する信念をもたらすはずだということが帰結する」。(ibid.,p.158)

このようにして時計が概念的に製作される。その時、同時に等質的時間が発生する。その本性は何だろうか。

## (二) 等質的時間の構成

本節では、運動そのものの記憶を軌跡へと変換することによって等質的時間が構成されることを示したい。

持続から直接的に同時性の系列へと向かう道は閉ざされている。というのも、運動そのものは同時性から、言うなれば時計的に分断されているからである。

われわれは同時性の系列を構成することができる<sup>(6)</sup>。二つの同時性の間にさらに無数の同時性を指定することを妨げるものは何もないからである。しかし、それらの同時性には運動を自ずから形成するような力はない。というのも、それらの同時性は単に存在しているだけであって、静止して存在しているわけではないからである。静止して存在しているのであれば、時間論によっては、現在を瞬間＝現在と幅のある現在へと二重化することによって、前者における同時性の静止と後者におけるその運動とを両立できるかもしれない。というのも

静止とは運動の静止だからである。しかし、ベルクソンは運動から運動そのものを抽象したため、同時性には位置関係しか残っていないのであり、それらの同時性に等質的時間を構成できるような連続への自発性を期待することはできないのである。実際、「思考の映画仕掛け」を思い出してほしい。同時性平面とでもいべき一枚一枚の写真が多数集まって系列を形成しているというだけでは映画にはならないのであり、それらを映画にするためには映写機が必要なのであった。写真は系列を形成した上で、さらに動かなければならないのであるが、その力を自分では持たないのである。

前節の議論を思い出そう。速さとは二つの距離の「比」であった。そしてまた、われわれは石が落下し終わるのを待たねばならなかった。したがって、われわれは距離と運動そのものを既に手に入れているわけである。運動そのものから出発すれば、本来は持続の観念が得られるはずである。ところがそうならないのは、運動そのものの観念と同時に距離の観念をもわれわれは手に入れてしまうからである。時計の製作においては、運動そのものは距離を形成するという目的のためにだけ利用されたのであった。ところで、距離を製作するためには、両端がなければ距離はあり得ないので、同時性が少なくとも二つ必要である。単純な直進運動の場合ならば、はじめの同時性 (ex.石から手を離れた瞬間) によって石とは別の物体の位置Aが得られ、次の同時性 (ex.石の地表との接触の瞬間) によって同じ物体の位置Bが得られるとき、長さABが作られるのである。距離の製作のためには、すなわち時計の製作のためには、同時性が少なくとも二つは必要であるという、この当然の事実が示しているものは、われわれにとって重要である。というのも、その時、同時性そのものには不可能であった二つの同時性の連結という契機が生じているからである。こうした結合の問題の出現は等質的時間においては必然的である。というのも持続はその相互浸透性によってこの問題を免除されているのであるが、同時性には相互浸透はあり得ないからである。実を言えば、二つの同時性を距離という観念によって結合すること、それがまさに等質的時間なのである。しかし、この時、距離という観念が意味しているのものは何だろうか。

先ほど述べたように、われわれは距離すなわち線分を持っている。かつ、それを同時性によって作ることに貢献した運動そのものも持っている。等質的時間の構成のためには、これら二つを混同しなければならない。時計の概念的製作だけで等質的時間の叙述には十分だと言われるかもしれない。というのも、時計の概念的製作に必要とされるものと等質的時間の構成のために必要とされるものとは同一だからである。運動そのものと、距離と、「比」としての「1」である。等質的時間と時計は同時に発生し、しかも時計は明らかに社会生活の役に立っている。しかし、われわれの目的は等質的時間の内実の記述にある。そこで、持続と空間との混同を、われわれは、「流れ」を誤って感じさせることだと言おう。等質的時間は真の時間ではないのだから、持続的な意味では、そこに「流れ」などあるはずもない。しかし等質的時間の支持者はいるわけであるし、むしろ大多数の人々がその支持者だと想定しなければならない。そしてもちろん、先にほのめかしたように、彼らも時間の「流れ」を感じているわけである。だから等質的時間にも、「流れ」の表象、しかも誤った表象はあるわけである。たとえ誤ったものではあっても「流れ」の感じがなかったならば、人々は等質的時間を時間として認知することはなかったであろう。故に、彼らが何故「流れ」を感じる

のかということわれわれは探求しなければならないのである。等質的時間はベルクソンにしてみれば誤った時間なのであるから、われわれがこれからしなければならないことは、正しく誤るという作業である。そこで、想像力の働きを借りて観念的空間を意識の中に作りだし、その中で点を動かすという、等質的時間の「流れ」についての簡単な反省をしてみよう。

〈私〉は意識内の空間を動いている点を観察する。その点は点ではあるが、ある大きさを持っている。点は前後・左右・上下どこにでも自由に動くことができると〈私〉には感じられる。それは直進したり、曲線を描いたり、あるいはジグザグに動いたりする。点の動きをコントロールしているのは確かに〈私〉ではあるが、しかし〈私〉には点そのものが自発的に動いているように見える。〈私〉はある程度の自由を点に与えているのだ。やがて〈私〉は点が前進してばかりいること、後退することは決してないということに気付く。〈私〉の命令によって点を後退させることはもちろんできるが、点にとってはその後退さえ前進として後退しているように〈私〉には見える。その前進に〈私〉は時間の「流れ」を感じる。点が動いている以上、どうしても時間が必要であるように思われるからだ。だが、どうして〈私〉は前進している点と、後退を前進している点を混同してしまわないのだろうか。両者の空間的位置はまったく同一であるはずなのに。そもそも、なぜ〈私〉は点が前進または後退しているとわかったのであろうか。それは〈私〉が点のかつての位置を記憶しているからだ。点が曲線を描いているとか、ジグザグに進んでいるとか言えるのも、点の軌跡を〈私〉が記憶しているからこそである。それどころか、〈私〉はいつの間にか彗星の尾のごときものを点に随伴させてしまうことさえある。そこで点にその運動の純粹さを回復させるために、こうした記憶の寄与分を消去することにしよう。記憶は空間の中にはそれ自体としては存在し得ないはずだからだ。そうすると〈私〉はただちに知る。記憶を除去したその時には、点の運動も止まってしまうことを。記憶の寄与分の消去を試みている時、〈私〉は記憶と空間のせめぎ合いを経験する。記憶が運動を肯定しようとするその時に、空間がそれを否定しようとしているように〈私〉には感じられる。あるいは逆に、同時性が点を止めようとするその瞬間、記憶がやってきて否を言うように感じられる。こうして〈私〉は、点の運動のためには少なくとも極小の幅すなわち「ここからそこへ」がなければならないこと、そして同時に、「そこ」が運動によって目指されている時には「ここ」の空間的位置は、空間によってではなく、記憶によって保持されていなければならないことを認識する。記憶されている空間的位置を「先行的位置」<sup>(7)</sup>と呼び、実際の空間的位置を「現実的位置」と言うことが許されるならば、点が運動するためには「そこ」の「現実的位置」と「ここ」の「先行的位置」がなければならないように〈私〉には思われる。そして「ここ」の「先行的位置」は「ここ」の「現実的位置」に瞬時に取って代わられるように〈私〉には感じられる……。

この反省に正当性があるとすれば、われわれはそれを以下のように述べなおすことができる。点が前進すること、そのこと自体にわれわれは等質的な時間感覚を持つ。すなわち「流れ」の感じを持つ。だが、前進の観念は現在の位置とそれ以前の位置を比較することによってしか得られないはずである<sup>(8)</sup>。そこで、それらの二点が作る距離の一方の端を始点と呼び、もう一方の端を終点と言うことにしよう。つまり前段落で言う「ここ」が始点であり、「そこ」が終点であるとしよう。たとえば、時計を製作している時には、それを構成することが

目的であった距離の一方の端は本当に始点であるように見えたはずである。始点と終点とを措定しなければ距離を測定することができないからである。最初の同時性ととも、長さの測定がそこから始まり、運動体は移動しつつ、やがて二番目の同時性たる終点を通過するように見えた。そのようにして、運動体は始点から終点への軌跡つまりは距離を持つように見えた。ここで注意すべきは、このプロセスはそのよう見え、そのように感じられただけだということである。というのも、空間には同時性すなわち位置関係しかないからである。『試論』における同時性という概念は記憶によって距離の感じが作られようとするやいなや、それを即座に否定する働きを負わされている。同時性は心理的な意味での距離<sup>9)</sup>を否定し去るのである。

終点は始点の後に来るように感じられるが、実を言えば、運動体が終点に達したときには始点は既に消えてしまっているのである。ここに始点が消えてしまっているとは、もちろんその空間的位置が消えたということではなく、始点に運動体があった時、それが持っていたはずの始点性とも言うべきものは空間中では表現され得ないということである。というのも始点の始点性は記憶の中でしか保持されることができず、空間には何も残っていないからである。空間には位置しかなく、かつて始点があった位置に始点性のいわば残り香を嗅ごうと思っても無駄なのである。こうした場合の始点は「先行的位置」と言われる。ところで、始点と終点は実は空間中に描かれた距離の両端であるにすぎなかった。ここでは始点と終点は同時に与えられている。実際、始点の空間的位置は常に同定可能である。こうした場合の始点は「現実的位置」を持つ。われわれはこうして二種類の始点を持つようになる。ある空間的な大きさを現に占有している線分の端としての始点すなわち「現実的位置」と、空間的位置をかつては持っていた運動の始まりとしての始点すなわち「先行的位置」とである。空間座標から言えば、これら二つの始点の位置は完全に同一である。また「ここからそこへ」の観点から言えば、それら二つの始点に合わせて、われわれは「先行的位置」が作り出すいわば「記憶的距離」と、「現実的距離」を想定できるということである。

「先行的位置」と「現実的位置」を同一空間内で両立することは不可能であるはずである。というのも一方の位置は過去にあり、つまりは完全に消え去っており、他方の位置は現在にあるからである。ところが、これら二つの位置の座標が全く同じ数値で表現されることを奇貨として、「先行的位置」は「現実的位置」であると強弁するところに等質的時間が胚胎するのである。強弁しなければならない理由は以下の二つである。第一に、「現実的距離」は本当は線分であるにすぎず、それはそもそも時間性を持っていないからである。第二に、「先行的位置」は、本当はそれは記憶の中にしかないのであるから、持続の観念を呼び起こすでもあろうからである。

「先行的位置」は軌跡の成立すなわち時間的な順序の観念(点の前進の観念)の発生のために不可欠である。また「現実的位置」は線分の成立のために不可欠である。これら二つの位置の等価性を主張することで、線分の中を移動する点すなわち等質的時間が発生するのである。等質的時間の本性とは過去と現在を、時間においてではなく、距離すなわち空間において総合しようとすることにある<sup>10)</sup>。このようにして、等質的時間が構成され、「流れ」が偽造されるのである。そして、この不可能に見える総合を常識は支持するはずである。とい

うのも、空間的事物は時間的耐久力を持っているので持続するように見え、したがって空間に過去を保存する能力があるように感じられるからである。ベルクソンにしてみれば空間から過去を除去するべきであるのだが、しかし空間においてこそ過去が保存されているようにどうしても見えてしまうという点に困難があるわけである。こうして空間と持続との分離に際しての「信じがたい困難」(ibid.,p.91)にベルクソンは直面することになるのである。

### (三) 直線としての等質的時間

等質的時間は直線上を移動する点という象徴<sup>(41)</sup>によって理解されているので、直線としての等質的時間についても触れておきたい。以下、直線上を動く点による等質的時間の表現を「直線モデル」<sup>(42)</sup>と呼ぶことにしよう。これが時間のもっとも普遍的なシンボルであると思われる。

「直線モデル」の長所は過去・現在・未来といういわゆる時間様相を明快に図示できることにある。点が現在であり、その左右に過去と未来が配分される。さらに、時間の「流れ」についての二つの感じ、すなわち現在が未来に進行していく感じと、未来が現在にやってくる感じをも「直線モデル」は示すことができる。それは直線上を点が右に動くか、それとも点の方を固定しておいて直線自体が左に動くかによって表現される。

「直線モデル」は便宜的に四種類に分類される<sup>(43)</sup>。第一の「直線モデル」においては点のある位置が現在であり、その左右に過去と未来が分配されている。そして直線上をどうしてかわからないが点が動く。直線と点しかなく、動かしているのも実のところはそれを思惟している者の想像力にすぎないのであるから、点の動きが時間をあらわすと言われてもわからない方がむしろ当然である。点を中心として本当は単なる「右」と「左」にすぎない半直線に「未来」と「過去」という別の名前を与えただけだからである。確かにわかっていることは、その点とそれを考察している思考の間には同時性を語るができるということである。つまり点は常に現在である。しかし、点が停止していても同じように同時性を語るができるから、それどころか直線そのものに対してもやはり同時性を語りうるから、第一の「直線モデル」<sup>(44)</sup>では点の運動によって時間を説明することはできないのである。そこでは、すべてが一つの同じ同時性において存在しているため時間を導入することが原理的にできないので、点とはとにかく動くときとされ、点の移動は不可解にも時間をあらわすとされる。こうしたわからなさは時間を空間によって表現することの不可解性なのである。つまり、第一の「直線モデル」は空間で時間を表現することの不可解性を雄弁に語る。しかし、そうになってしまうとかえって、その不可解性以外のものに持続と空間の混同における持続の寄与分を見出すことはちょっと難しくなるだろう。しかし点はやはり動くときとされ、それが時間をあらわすとされる。つまるところ、ここでの点の運動は時間論的な論拠を持っているわけではなく、単に数学的なものにすぎないのである。このことは、第一の「直線モデル」は時間のシンボルではあり得ても、シンボルにすぎないということを示している。

そうではない、と等質的時間の支持者は言うであろう。直線上の諸点が一つの同じ同時性においてあるのではなく、諸点のそれぞれが別々の同時性を指示しており、無限の過去から無限の未来に向かって無数の同時性が連なっているのである、そしてその連なり自体がまさ

しく時間である、と。つまり、点は数学的な意味で動くのではなく、それが動くこと自体が時間であるということである。第二の「直線モデル」の意味がこうしたものであるならば、それはわれわれが前節で述べた等質的時間の解釈と同じ構造を持っていることを示そう。

さて、こうした「直線モデル」は例えば次のような日常生活の一コマをその心理的起源としているのではなかろうか。教師が黒板にチョークで直線を描くとしよう。その直線は確かに本物のイデア的直線ではないが、それでかまわない。黒板上の描かれつつある直線とチョークとの接点に現在がある。描かれた直線の総量が増加するに伴ってチョークは小さくなっていく。描かれた直線の総体は過去に属し、小さくなっていくチョークは未来をあらわす。ここで注意しなければならないことは、描かれた直線の全体は確かに過去の何ものかを持っていると確信されてはいるが、つまり直線が描かれることを目撃しつつある生徒たちの記憶があるわけであるが、しかし同時に現在でもあるということである。というのも、描かれた直線を維持し保存しているのは黒板という空間的事物だからである。黒板によって、黒板上の直線への記憶の投射によって、過去のものと現在が両立されているのである。そうでないなら、直線があるとは言えても、それが描かれつつあるとは言えないだろう。ジャンケレヴィッチ的な表現をするならば、等質的時間とは瞬間＝現在によって現在分詞を捏造する試みである。こうした事態は前節でわれわれが述べた内容と一致する。つまり、「先行的位置」と「現実的位置」が同一視されているのである。空間において過去のしるしを持つように見えるものが保存されること、それが等質的時間の本性である。われわれは第一の「直線モデル」を一つの同じ同時性において諸点が共存しているにすぎないと批判的に紹介したが、それは、そこでは点の集合によって直線が作られていただけであったので、直線そのものによってしか諸点および点の運動は維持されておらず、結局は点の運動を維持していたのは点と同時的な直線だったからである。しかし今回は、黒板が描かれた直線を維持してくれるので、直線が描かれていくことそれ自体に時間の「流れ」の感じを模造することができたわけである。こうした事情は、第三の「直線モデル」すなわち点が同時性平面（一枚の映画フィルム）を指示し、同時性平面の連なりが時間であるという主張においてもかわらない。過去の諸平面が存続していなければ「直線モデル」自体が成立しないわけであるから、それらの平面を維持する空間が必ず想定されるであろうからである。つまり等質的時間とは、図形的シンボルによって表現される限りで、必ず空間的な地を持った時間なのである<sup>(16)</sup>。点は線によって、線は面によって、面は空間によって維持される。第四の「直線モデル」である同時的空間に關しても、それを包含するさらに大きな空間が地になるのである。

前節と本節の内容を要約しておこう。等質的時間とはなにか。等質的時間の本性とは、空間における過去と現在の総合である<sup>(16)</sup>。では、持続とはなにか。持続の本性とは、非媒介的意識における過去と現在の総合である<sup>(17)</sup>。非媒介的意識に保持されていたはずの比較的直接的な過去の記憶（「先行的位置」）が瞬時に空間（「現実的位置」）へと変容すること、これが持続と空間の混同である。

等質的時間の支持者であっても直線がそのまま時間ではないことは認めるであろう。直線そのものと時間との区別に「信じがたい困難」を感じる者がいるだろうか。だから問題は直線か持続かという点にあるのではない。そうではなく、等質的時間と持続の間にあるのは、

過去を現在に総合するのは空間か時間かという対立なのである。これは一見したところ簡単に解決できそうな問題ではあるが、実はちがう。というのも、過去は時間様相なのだから過去を総合しているのは時間であるはずだという、ありそうな主張は論点先取の誤りを犯しているからである。過去は本当に時間的なかと問われているからである。この問いが解決困難である理由は、誤解をおそれず敢えて簡潔な表現をすれば、過去が言わば透かし模様で現に目に見えているように感じられるからである（黒板上の直線）。地層の生成がそうであるように、空間の内部に時間が沈殿していくように見える。空間的事物は私と共に年を重ねていくように感じられる。一言でいえば、物質も持続するようになる。そして物質を維持しているのは空間なのである。ベルクソンは「外的対象には流れ去った時間のしるしは刻まれておらず、そのため物理学者は、諸瞬間の多様性にもかかわらず、同一の要素的諸条件を何度も目にしうる」（*ibid.*, p.150）と述べているが、等質的時間の支持者が反対するのはまさにここである。彼らにしてみれば、引用文中の「外的対象」と「要素的諸条件」は本来まったく別の事柄であるはずである。自然落下のために必要な同一の要素的諸条件が何度もそろい、したがってそれを何度も目にし得るということと、自然落下する石そのものとは相互独立的である。そして、等質的時間の支持者が注目しているのは後者なのである。ベルクソンは『試論』において同時性という概念を厳格に使用した<sup>(48)</sup> ため、またその概念によって空間と物質を包摂しようとしたため、物質に時間性を認めることができないのである。しかし、「流れ去った時間のしるし」の刻まれていない外的対象など本当に存在するのだろうか。等質的時間の支持者が問うのはそこである。そして、ここにこそ『試論』における持続と等質的時間との根本的な対立点があるのである。

#### （四）等質的時間と物的順序

等質的時間の本性は空間における現在と過去の総合であるとわれわれは主張した。そして、その総合を常識は支持するだろうとも述べた。ところで、現在と過去の空間的総合とは、物質においてそれがなされているということをも意味している。物質における過去の蓄積が論じられなければならない。

物質における「流れ去った時間のしるし」の沈殿とは因果性である。なぜなら物質の規則正しい継起は普通、因果性と呼ばれるからである。ただし、ここでは、この術語はなるべく漠然<sup>(49)</sup> と解されるべきである。「Cならば、その時常にE」という哲学的には少々雑だと考えられている定式でさえ、この場合には高度すぎる。ベルクソンが次のように述べていることが参考になるだろう。

実際、二つの現象の規則的な継起を確認することは、前者が与えられる際には既に後者が覚知されているのを認めることである。しかし、二つの表象のこのまったく主観的な結合に常識は満足しない。常識にとっては、第二の現象の観念が第一の現象の観念のうちに既に含まれているなら、第二の現象そのものが第一の現象のただ中に何らかの形で客観的に現存していなければならないように思えるのである。（*ibid.*, p.153）

常識にあっては規則的継起は特に哲学的に分析されることなく、感じられるまま受け入れられる。客観的結合も主観的結合も結合である限りにおいて同じであり、しかも主観的結合はたいいていの場合、客観的結合によって確証されるのである。球根から花へという主観的連想は、やがて実物の花と球根によって実証されるであろう。花と球根の「二つの現象」のどちらがどちらに主観的および客観的に含まれるとしてもかまわない。つまるところ、常識的思考は過去がただ主観的な観念としてのみならず、客観的な継起として現象の中に蓄積されることを信じているのである。

因果性を上のように漠然と解すとき、それは等質的時間の内実を構成するにいたる。等質的時間が支持されるときには、漠然とした因果性への信念も存在するであろう。もちろん、等質的時間と因果性は相互独立の概念である。にもかかわらず、それらがこのような密接な関係を持つのは、等質的時間と因果性とが理論的類似性を持っているからである<sup>(20)</sup>。その類似性の源泉は、過去と現在の空間的総合にある。等質的時間とは二つの同時性の結合であるが、それらは距離の観念によって結合されていた。因果性は二つの同時性を物質において結合する。今や、自転車が古びるのは、持続としての時間が流れるからではなく、何らかの化学的過程によるのである。子供が大人になるのは生命的持続によるのではなく、身体に内在している何らかの因果連関によるのである。総じて言えば、宇宙が進展しているのは、時間が宇宙を押ししているからではなく物的因果性の総体的効果によるのである。

それら二つの関係、さらにはそれらと持続の関係はどうなっているのか。ベルクソンはこう述べている。

科学の観点からすると、持続の間隔そのものは考慮されないということをはっきり証拠立てているのは、宇宙のすべての運動が二倍、三倍速く生じたところで、われわれの持っている公式にも、そこに代入される数値にも何ら変更を加える必要はないということである。・・(中略)・・たとえば天文学者が日食を予言するとき、彼はまさにこの種の操作に身をゆだねている。つまり、持続の間隔は科学にとって考慮されないものであるから、天文学者はこれを無限に縮減していき、かくしてきわめて短い時間——せいぜい数秒間——のうちに、具体的な意識にとっては数世紀をも占めるであろうほどの数の同時性の継起を覚知するのである。(ibid.,p.87., cf.,p.146)

引用から明らかであるように、過去と現在の空間的総合にとって運動の速さは偶然的である。引用文中の「公式」と「そこに代入される数値」という言葉に注目しよう。この「公式」が物理学的法則であることは明白である。「そこに代入される数値」も物理的数値であろう。たとえ宇宙のすべての運動が三倍速くなっても、例えば太陽と地球との距離やそれらの質量は変わらないということである。運動方程式も変化しない。もちろん日食が生じるということ自体も同様である。いくら運動が速くなったところで、宇宙の運行自体に変化はないのである。そうでなければ天文学的予見が不可能になるからである。つまり速度の変化は諸現象の順序に手を触れることはできない。このことは過去と現在の空間的総合にとって因果性が必須の要素であることを示している。というのも、引用文から明らかであるように、等質的時

間と因果性は同調しているからである。それらはパラレルなのである。

点には自ら延長して線となる力がないように、同時性には自ら重なり合って時間と化す能力はない。等質的時間とは空間における過去と現在の総合であるとわれわれは述べたが、その構築のために必要不可欠な記憶力は持続に属している。つまり等質的時間とはまさに混合体なのであり、そのままの状態においては、それと持続は同じリズムを持つ。しかし、等質的時間は最後には科学的な時間として表象されるようになる。この時まさに、等質的時間は持続から独立するのである。前者における運動は後者のそれより何万倍速くなくてもよいとされる。等質的時間に持続とは異なるリズムが許容されるようになると、つまり等質的時間が科学的に客観的な時間として自足するようになると、持続とは別のリズムを発生させるメトロノームが必要になる。等質的時間がそれでも時間の感じをわれわれに与えるのは、そうしたメトロノームをそれが実際に持っているからである。それはなにか。それは、等質的時間が宇宙の運行の因果的順序を遵守しているということである。物質そのものの中に正しい順序で沈殿した「流れ去った時間のしるし」を見いだすこと、そこに等質的時間のリアリティがある<sup>(21)</sup>。

以上から、等質的時間と持続と物的因果性に関して、次のような関係が成立していることがわかる。等質的時間と持続は峻別されねばならない。しかし、事実上の等質的時間は持続の寄与分を持っているので、それら二つの時間は日常生活においては同調している。次に、等質的時間と因果性については、過去と現在の空間的综合という点で共通項を持ち、したがって同調している。残るは、持続と物的因果性の関係についてであるが、これら二つは同調するはずがないのである。にもかかわらず、ベルクソン自身が次のように述べているのは興味深い。「たしかにわれわれは、事物がわれわれのようには持続しないにしても、事物のうちには何か不可解な理由が存しているはずで、そのために、諸現象は一挙に展開されることなく相継起するものとして現れるのだということを痛感している」(ibid.,p.157)。この引用は、『試論』のベルクソンでさえ事物に持続のごときものを認めないわけにはいかなかったことを示している<sup>(22)</sup>。というのも「不可解な理由」が「事物のうち」にある以上は、その理由は、それがどんなものであれ、物的なものでしかあり得ないからである。そして、「諸現象は一挙に展開されることなく相継起する」ことこそが、過去と現在の空間的综合にとって重要なのである。物質はそれ自体で相継起する能力を持つとされたのだから、そこには展開の因果的順序があるはずだからである。もちろん、本来ならば、物的順序と同調するのは等質的時間なのである。しかし、実際には、持続と物質的継起は「不可解」にも同調して生起している。持続と等質的時間と物的順序は結局は同調するということである。しかも持続の寄与分をもった等質的時間において、因果性は遵守されている。これでは、まるで等質的時間が物質と持続を媒介しているかのようなのではないか。

こうしたことから、物質の持続という存在論的問題<sup>(23)</sup>が提起されるのである。だが、これは『試論』の思想圏をこえる問題であるように思われる。

## (五) 要約と展望

本稿の内容を簡単にふりかえっておきたい。

第一節でわれわれが論じたのは、時計の概念的製作であった。時計とともに等質的時間が発生するからである。そこで得られた概念は、運動そのものと、距離と、「比」としての「1」であった。第二節では、第一節の成果を利用して、等質的時間の構成を試みた。その結果、等質的時間とは現在と過去の空間における総合であることがわかった。時間の空間化とは「先行的位置」と「現実的位置」との混同なのであった。第三節では、「直線モデル」としての等質的時間を論じ、第二節の結論を補強した。そして、第四節では、等質的時間のいわば物質化である因果性を論じたのであった。

全体的に言えば、過去は時間と空間のどちらに属するのかという問いを中心に本稿は展開した。過去は空間に属すると等質的時間は言い、ベルクソンは時間に属すると言うのである。常識は等質的時間を支持し、それどころか物質的なものへの過去の蓄積を認めるのであった。

われわれが時間の本性を内省するとき、必ず出会う問題が物質の持続の問題である。どうしても物質は持続するように見えるのである。ベルクソンもこの問題に出会っていた。この問題を解くために、ベルクソンが『試論』において使用した概念は同時性<sup>(24)</sup>であった。その概念は物質がまさに持続して見えようとするときに、否を言う役割を持っている。この概念を導入しなければ、空間概念の洗練もあり得なかつたであろうし、それはまた持続概念についても同様なのである。同時性は持続の領域の存在をほめめかすことができるほど強力な概念である。しかし、代償も大きかった。物質の持続を否定する同時性という概念によっては、物質の問題を位置関係としてしか取り扱うことができなくなったからである。だから、ベルクソンは『物質と記憶』において物質の持続を考察する必要があつたし、同時性についても再考しなければならなかつたのである。同時性は、『物質と記憶』において「純粹知覚」へと変容することになるであろう。だが、そうしたことについて稿を改めて論じなければならない。

## （註）

ベルクソンからの引用は単行本のページ数を、直接本文中に記入した。その際、以下の略号を用いた。註を含めて、傍点はすべて筆者によるものと思われたい。

D.I. *Essai sur les données immédiates de la conscience*

- (1) cf., D.I., p.90 「このような用途に用いられる空間がまさに等質的時間と呼ばれるものである。」
- (2) 植村恒一郎氏の優れた研究書『時間の本性』（勁草書房 2002）の第1章を参照せよ。
- (3) このような「流れ」が真の持続であるのか、それとも単に「すべり去るような持続」（*op.cit.*, p.116）にすぎないのかが問題なのである。
- (4) voir, *ibid.*, p.148 「すべての予見は実際には見ることであり、見る事が実行されるのは、未来の時間の間隔を、それらのあいだの比（rapport）を保ちつつ、徐々に縮減しうる場合だけである。」
- (5) voir, *ibid.*, pp.146-147 「要するに、天文学において時間と言われているものは数であり、この数の諸単位の本性は計算の中では特定され得ない。」
- (6) voir, *ibid.*, p.76 「私は・・・諸項を区別した上で、それらをいっしょに配列する能力を持っている。」
- (7) voir, *ibid.*, p.92 「現実的位置（la position actuelle）とわれわれの記憶が先行的位置（les positions antérieures）と呼ぶものとのあいだで、われわれの意識による綜合（synthèse）がなされると・・・」
- (8) voir, *ibid.*, p.86 「どんな継起も現在と過去との比較によって考えられるので・・・」
- (9) voir, *ibid.*, pp.89-90 「外的世界における継起的と称される諸状態の各々だけが現存しているのであって、それらの多様性が実在性を持つのはただ、まずはそれらを保存し、次いでそれらをお互いに外在的なものたらしめて併置することのできる意識に対してのみである。」
- (10) voir, *ibid.*, p.84 「あたかも、進展の空間内へのこの局在化が、意識の外においてさえ、過去が現在と共存することを主張することに行き着かないかのように！」
- (11) AがBのシンボルであると言われる場合、通常は、AはBではないということが含意されている。しかし時間論においては、Bにあたるものが不明であるので、シンボルにすぎないAが時間の実質をなしてしまうことがあるという点に困難があるのである。
- (12) voir, *ibid.*, p.73 「時間を、もろもろの意識状態がそこで展開されるかに見える等質的な媒体たらしめるとき、まさにそれによって時間は一挙に与えられる」。  
cf., *ibid.*, p.75 「継起はわれわれにとって連続的な線あるいは鎖の形をとる」。
- (13) これはもちろんベルクソン本人によるものではなく、議論の明晰性のために、論者が仮に設定したものである。
- (14) voir, *ibid.*, p.76 「連続的な線あるいは鎖というイメージが含意しているのは、前と後についての、もはや継起的ではなく同時的な知覚である」。

- (15) voir, *ibid.*, p.178 「その諸瞬間が相互浸透している異質的な持続の代わりに、われわれは、その時、その諸瞬間が空間内に配列される等質的時間を持つだろう」。
- (16) 註 (10) を参照せよ。
- (17) voir, *ibid.*, p.90 「意識が外界のさまざまな状態を保存するのは、それらが・・・過去を現在に結びつけるところの意識的諸事象を引き起こすからである」
- (18) voir, *ibid.*, p.89 「空間のうちには、持続も継起さえも存在しない」。
- (19) cf., *ibid.*, pp.159-160 「われわれが現象Aそのものを、現象Bが不明瞭な (confus) 表象の形の下で含まれている、ある心理的状态たらしめることは自然なことである」
- (20) voir, *ibid.*, p.163 「こうした融合はわれわれに、一方で、われわれ自身の現存の二つの瞬間のあいだにある連関を、他方で、外界の継起的諸瞬間を結びつけている関係を、同じ仕方で表象し、同じ語で指示することをゆるすからである」。
- (21) ベルクソンはカントの超越論的感性論を否定しているのであるから、ベルクソン哲学における等質的時間はア・ポステリオリな時間であることになる。
- (22) cf., *ibid.*, p.89 「持続と運動は精神的綜合であり、事物ではない」。
- (23) cf., G. Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., 1968, pp.43-44
- (24) cf., D.I., p.82 「これら二項すなわち空間と持続のトレ・デュニオンは同時性である」。